要約

本論文はゲーテにおける「ガイスト（Geist）」概念を論じたものである。ガイスト概念の背後にはきわめて複雑な概念史があるが、**「はじめに――ゲーテにおけるガイスト概念という問い」**で見たように、アーデルングの『高地ドイツ語辞典』にしたがえば、古代ギリシア語のプネウマからラテン語のスピリトゥスを経てガイストにいたる系譜にこそ着目することができる。

プネウマの原義は、空気のうごきとしての息吹あるいは風、さらには、そこに感じられる生命力にあった。アリストテレスに代表される古代ギリシアの生物学にも、聖書に見られるユダヤ・キリスト教の生命観にも、現世に宿る神的な生命原理としてのプネウマ・イメージが共通して見出せる。さらにグノーシス主義の人間論においては、プネウマは死後の救済を担保する終末論的原理としても捉えられていた。

こうしたイメージを源流にもつガイスト概念は、特に一八世紀後半から一九世紀前半にかけて、近代ドイツ思想・文学に不可欠の概念となった。その後、二〇世紀の哲学においては多くの批判をこうむることになったが、今日では生命や人間とは何かを根本的に再考するための手がかりとして、ふたたび脚光を浴びはじめている。

とはいえガイスト概念をめぐる思想史研究において、ゲーテはほとんど論じられてこなかった。その主因は彼のテキストにおけるガイスト概念の多義性と流動性に見出せよう。たしかに定義は難しい。しかし特定のテキスト間におけるイメージのネットワークに注目すれば、たとえ限定的であっても、ゲーテのテキストにおいてガイスト概念が変容していく際の力学のひとつを捉えることができるのではないか。こうした目論見のもと本論文では五章構成で論述を行った。

第一章「永遠なるガイスト――若きゲーテの霊感論」では、ゲーテが一七七五年にヴァイマルへと移住するまでの時期に書かれたテキストを扱った。まず**第一節「プネウマと人間の言語」**で取り上げたのは、神学論文『聖書の二つの問い』（一七七三年）後半部の「聖なるガイスト」論である。新約聖書にいう「舌語り」を説明する際に導入される「ガイストの言語」という表現は、降霊によって人間の主体性を奪い去るガイストのはたらきを指し示している。それは人間の言語をこえた言語だとされ、さらにそこから、永遠なる神と時間的な人間との対比のもとで、人間の限定性が時間論的に表象されることになる。プネウマと同一視されるガイストは、ここで神と人間を結ぶメディウムとして〈永遠と時間のあいだ〉に位置する。ゲーテは、このガイストないしプネウマをキリスト教にいう「聖霊」に限定されない普遍的霊性を指すものと捉え直し、プネウマよりもヌースを重要視するパウロを批判して、これに与ることのできる例外者を待ち望む叫びによって論文を締めくくる。

こうして『聖書の二つの問い』末尾で「永遠のガイスト」に与りうる「選ばれし者」を要請しながら、ゲーテはほぼ同時期に書かれたと推測される『ファウスト初期稿』では、主人公ファウストをそのような霊的天才として描いていない。**第二節「大地ガイストと時間性」**

で考察したように、ファウストはきわめて人間的で時間的な存在として造形されている。それゆえ彼は、根源的な生命原理として〈永遠と時間のあいだ〉にいる「大地のガイスト（Geist der Erde）」とまともに相対することができない。大地ガイストは共時性と通時性の同居という矛盾を文学的に表象しており、その意味でゲーテ後年における根源イメージおよびメタモルフォーゼ論を先取りしている。

第二章「神話の「現在」――方法としての発生論」では、第一章の議論を引き継ぎ、異なる時間相の重なりを動的に把握する発生論的な観察眼に着目してゲーテの時間論の一端を明らかにした。**第一節「地学と自然史」**で論じた地学論文『花崗岩II』（一七八五年）では、創世記冒頭に描かれる原初の生命原理としてのガイスト＝プネウマが、悠久の自然史に介在されたかたちで叙述されている。地学論文の著者ゲーテは、ヒューマン・スケールをこえる長い時間を媒介にして、プネウマ＝ガイストを語りの俎上に載せているのである。いわゆる「自然の時間化」のプロセスが進むなか、ゲーテは生命の根源に関する世界理解の神話的基層を保持するため、このように人間の時間性を逆手にとることによって科学と神話を接続しようとしていた。

つづく**第二節「現在という概念――ヘレナとファウスト」**では、ゲーテの「現在」概念の特質を浮かび上がらせ、それを手がかりにして『ファウスト第二部』第三幕に登場するヘレナ――古代ギリシア神話を出自とするガイスト――を解釈した。ゲーテは「現在のなかに過去と未来をみる」眼差しを徹底することで「現在」を象徴的で神的な時空間として捉えていた。『ファウスト第二部』においては、ヘレナがこのような「現在」概念の理想の極致を体現しているのに対して、彼女と息の合った掛け合いをしているはずのファウストは「現在」の特質を捉えきれず「瞬間」に囚われたままにとどまる。両者の共同生活は最終的に破綻してしまうが、このことは近代人が「現在」の深化を通じてガイストの世界に参入することの難しさを物語っていよう。

第三章「新プラトン主義の脱ヒエラルキー化」では、ヘレナ劇の背景をなすプラトニズム的二世界論の問題を探るため、ゲーテの新プラトン主義受容を考察した。**第一節「「プロティノス批判」と色彩論」**で明らかにしたように、ゲーテは「プロティノス批判」と呼ばれる箴言（一八〇五年）で、天上の「ガイスト的形相」の純粋な姿だけではなく、地上でそれが「生きた産出」をする場合の素晴らしさにも眼を向けようとしている。こうした永遠世界と時間世界の〈脱ヒエラルキー化〉は、色彩論における「くもり」の理論を中心として、一八〇〇年代以降のゲーテの世界観に反映させられることになった。

ただし、このような新プラトン主義理解は必ずしもゲーテにのみ見られるものではない。**第二節「プロティノス、フィチーノ、ゲーテ」**では、なかでもマルシリオ・フィチーノに着目し、ゲーテ『色彩論』教示篇の四行詩「眼が太陽的でなければ…」を手がかりにして、地上世界を離脱して「一者」へ帰還することを目指すプロティノスと、地上世界にも神的なものを見出だそうとするゲーテとのあいだに、フィチーノのルネサンス的新プラトン主義を位置づけた。そのように把握した場合、フィチーノにおける愛およびスピリトゥスの概念は、

ゲーテの「プロティノス批判」における「生きた産出」重視の姿勢に呼応すると考えられる。

第四章「メタモルフォーゼと環世界――ガイストの脱中心化」では、第二章と第三章の議論を受けつつ、ゲーテのメタモルフォーゼ論において生命体の環世界がもつ重要性を考察した。**第一節「ナマケモノの形態学」**で論じたのは晩年の書評論文『ナマケモノ論』（一八二二年）である。ここには自然哲学者トロクスラーからの引用というかたちでガイスト概念が導入されている。ただし第三章で見たようなガイストの〈脱ヒエラルキー化〉を基盤に置くゲーテ形態学は、生命体に内在する創造的ガイストそれ自体だけでなく、その周囲を取りまく環世界をも重視するようになっていた。それに対応してガイスト概念は『ナマケモノ論』で、環世界に合わせて自らを変容させる可塑性の能力として捉え直されている。ゲーテが形態学の文脈でこうしたガイスト概念を用いることは稀であった。そこにはトロクスラー的な自然哲学に対する警戒も透けて見える。とはいえ、わずかな用例を拾えば、ゲーテ形態学が主体と客体に共通するガイストというイメージをひそかに胚胎していたことが浮かび上がってくる。主客におけるガイストの同根性が認められるがゆえに、ゲーテ形態学では、科学者が「想像力」を駆使して対象を「詩的に」叙述することも許容される。

第二節「ホムンクルスと海」では、このように環世界へと論述の焦点を移行させていったゲーテ思想の特徴が、『ファウスト第二部』第二幕のホムンクルス劇において文学化されていると解釈した。ホムンクルスはフラスコに閉じ込められたガイストのみからなる人工生命だが、自らに欠けている肉体を求めて古代ギリシア世界に赴き、長い時間をかけて「人間になる」ため、場面の最後には始原の海たるエーゲ海に身を委ねることになる。ホムンクルスがそれからどのような道行きを辿ることになるのか、テキストの中では描かれない。読者の眼前に残されるのは、ホムンクルスというガイストを取り巻くエーゲ海の豊饒なエロス、そして、もはやストーリーの展開がなされない「場所」としての余白だけである。このような焦点の大胆な移動は〈ガイストの脱中心化〉と呼ぶことができよう。

しかしゲーテ晩年の文学テキストには、それでもなお、頑なに個的なあり方をするガイストも描かれている。その代表が、**第五章「エンテレケイアと救済の果て」**で論じたマカーリエ（『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』）とファウスト（『ファウスト第二部』第五幕）である。両者はいずれも「エンテレケイア」という言葉と関係している。**第一節「モナドの不滅」**で確認したように、ゲーテは生命創発の場面を「エンテレケイア」から「モナド」への展開としてイメージしており、それに対応して、生命体が死滅しても「偉大なエンテレケイア」は天界で活動を続けると考えていた。

第二節「マカーリエの命運」では、先行研究でしばしばプロティノスと関連づけられてきた聖女マカーリエの描写を分析した。彼女は特異な内面世界において不可思議な天界のヴィジョンを見ているとされ、しかもその幻視のなかで自らは螺旋状に太陽系から離れていっているという。このことは、マカーリエにおいて遠心力たるガイスト性があまりに強くはたらき、それに比して求心力たる肉体性があまりに弱いことに起因していると読み解ける。このアンバランスなあり方はゲーテのメタモルフォーゼ論とも関連する。それによると遠

心力が強すぎるときメタモルフォーゼの主体は最終的に無限のうちに消え去ってしまうという。作中では、マカーリエのような「エンテレケイア」が死後、神となって宇宙のどこかで反転し地上に戻ってきてほしいという願望が語られるが、彼女の人物造形に何重にもそのユートピア性が透けて見えることを勘案すれば、かの「エンテレケイア」の帰還そのものがユートピア的な希望にすぎないことが暗示されていると考えられる。

第三節「ファウストの救済」で論じたように、マカーリエとは対照的にファウストは最終場面で「救済」へと向かう。『ファウスト第二部』草稿には「ファウストのエンテレケイア」（ないしは「ファウストというエンテレケイア」）という表現があったが、最終稿においてこの表現は「ファウストの不死なるもの」（ないしは「ファウストという不死なるもの」）と書き換えられた。この「不死なるもの」は救済の場面において次第に〈ガイスト化〉していく。蝶のメタモルフォーゼのイメージで描き出されるそのプロセスは、これまでの議論を踏まえれば、〈脱ガイスト化〉のさらなる〈脱ガイスト化〉という戯れに満ちた「とても真摯な冗談」として把握できる。その際、草稿段階にあったキリストによるファウストの裁判というメシアニズムのモチーフは捨てられ、法の代わりに愛が救済の原理となる。ただしホムンクルス劇と同じように、ファウストが救済されるかどうかはテキストには描かれていない。読者の眼前には、またもや広大な余白が残される。

「おわりに――冗談と余白」では、このようにテキストが幕を閉じた後に残される余白に、ゲーテにおけるガイスト概念の運動のひとつの極致を見出した。ゲーテは〈永遠と時間のあいだ〉のガイストを語ろうとする中で、畢竟、ガイストを固定的な概念としては用いず、詩的な語りの重要性をくりかえし強調していた。ただし作品は言葉だけで完結するわけではない。ガイストの脱ガイスト化の運動の究極を描こうとする「詩」は、矛盾をあえて矛盾のままに描き出す真摯で奇異な「冗談」に重ねて、それでもなお語られないものを宿す「余白」によって成り立っている。テキストというシステムの外側に置かれた余白には、システム内で描かれた愛とメタモルフォーゼの余韻が漂っており、それが残響となって感じさせる自由な〈うごき〉の予感がある。それは、けっして虚無ではなく、これから発動せんとする生命に対する根本的な肯定と結びついている。

いまだ／もはや語りが存在しない「場所」としての余白においては、もちろんガイスト概念そのものは明示的には存在しえない。しかし振り返ってみると、プネウマ的なガイストの根源的なイメージは、もともと人間的なものを暗黙のうちに下支えする曖昧で捉えどころのない基底を指し示していたのではなかったか。ゲーテのテキストは、概念としてのガイストから繰り返し離脱しつづけることで、逆説的に、絶えずその基底の存在を示唆しているのではないか。それは、「生の秘密」として余白に潜在する根源であり、いまだ／もはや人間には語られることのない根源であり、無限の可能性を内蔵し続けることで、われわれの生を見えないところで支えている根源である。こうして、ゲーテにおけるガイスト概念は、明示的な主体や物語の彼岸にある生命の根源を、人間の語りの外縁をめぐる長大な迂回路を辿りながら、わずかにでも指し示そうとしている。